氏名	畠中　智惠
学位の種類	博士（体育学）
学位記番号	第５６号
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位授与年月日	令和２年９月１７日
学位論文題目	鬼ごっこ遊びにおける共感性を伴った視点取得行動が幼児のアサーション形成に与える影響について
論文審査委員	主査　森　司朗 副査　飯干　明 副査　中本　浩揮

論　文　概　要

本研究は，現代社会の主張ができないという問題の解決策として導入されているアサーションを適切に実行できることを目指している．そこで，アサーションが形成され始める幼児期に着目し，アサーション形成の基盤に対する鬼ごっこ場面での共感性を伴った視点取得行動の影響を明らかにすることを目的とした．そして，第１ステップとしてアサーション形成の基盤に関して検討を行い，第２ステップとして鬼ごっこ遊びの中で経験される共感性を伴った視点取得行動がアサーションの基盤形成に関連を示すかについて検討を行った．

研究１では，成人や青年期において適切にアサーションを実行するには，アサーションの基盤が形成されている必要があると考え，アサーションが形成される幼児期に着目した．そして，幼児期にアサーションの基盤が存在するのであれば，その基盤となるアサーションを測定することができると考え，幼児のアサーションを測定する尺度を作成した．結果として，幼児のアサーションは１因子にまとまりアサーションの構成要素が分化されていないことが示された．このことは，幼児のアサーションが児童期以降のアサーションの基盤として存在していることを示唆している．

次に研究２～４では，鬼ごっこ遊びの中で経験される共感性を伴った視点取得行動がアサーションの基盤形成に関連を示すかについて検討した．研究２では，幼児期のアサーションの高低における視点取得の特徴を調査した．そして，このような他者志向性の獲得に関して，からだが重要な役割を果たしていることが指摘されており，鬼ごっこのような集団遊びの中には他者の視点に立つ経験が含まれていることがわかっているため，幼児のアサーションは鬼ごっこの中で見られる他者の視点に立ち他者の到達地点を予測した追いかけ方（視点取得行動）と関連があると考えた．なお，課題として設定した鬼ごっこは，参加者全員がオニにもコにもなり得るという特徴を持つ，たから取り鬼を用いた．結果として，アサーションが高い幼児は，たから取り鬼の中で視点取得行動を多く行っていることが示

されたが，その一方で，アサーションが低いにも関わらず視点取得行動がみられた幼児も存在した．つまり，視点取得行動だけでは幼児のアサーションは形成されない可能性が示唆された．

そこで，研究 3 では視点取得を適切に機能させて社会的行動に結びつける共感性の要素を加えた．鬼ごっこは他者と共通のイメージやルールを共有する必要があり，鬼ごっこの中でみられる視点取得行動にも，他者の視点から行動を予測した行動と，鬼ごっこのルールや楽しさを他者と共有しながら他者の行動を予測した行動に分けられると考え，幼児のアサーションの高さには後者の共感性を伴った視点取得行動が関連していると考えた．しかしながら，幼児のアサーションと共感性の関係を示すことができなかった．ただし，研究 3 では 2 つの課題点が残されており，1 つは幼児のアサーション形成に関連する共感性が他にも存在すると考えられたこと，もう 1 つは視点取得行動に関してはオニ役時に見られる行動として定義されていたが，たから取り鬼ではオニとコが明確になっておらずオニとして追いかけた視点取得行動以外の要因が含まれていた可能性があった．

そのため，研究 4 では幼児特有で幼児の社会的行動を促進する行動レベルでの共感性を用い，さらに，視点取得行動を抽出する課題をオニとコの役割が明確な通常の鬼ごっこに変更し，共感性を伴った視点取得行動から幼児期のアサーション形成への関連について検討を行った．結果として，鬼ごっこの中での共感性を伴った視点取得行動から幼児のアサーション形成への関連には発達段階があり，自己と他者との関係を分化できている幼児は鬼ごっこの中で共感性を伴った視点取得行動を経験していること，そしてこのような経験が幼児のアサーション形成に関連することが明らかになった．さらに，この発達過程には自己と他者が分化されるための移行期が存在していた．この移行期は視点取得が自己と他者の関係の分化が始まる段階にあり，これ以前の段階は自己と他者の未分化に基づいた共感性が幼児のアサーション形成を促していたが，この発達に従って共感性が視点取得に基づいたものとなる．そうすると，鬼ごっこの中で他者の視点に立ち他者と鬼ごっこの遊びを共有できるようになるため，鬼ごっこの中でみられる視点取得行動が単に他者視点に立つものではなく，共感性を伴った視点取得行動へと変化していく．そしてこのような経験が幼児のアサーション形成に関連していると考えられた．

最後に，上述のような共感性を伴った視点取得行動が幼児のアサーションを形成していくためには自己と他者の関係が分化されることが重要となる．鬼ごっこでは他者と共通のイメージやルールを共有しなければならず，その中で他者の視点に立つ経験も含まれている．さらに，幼児の他者志向性の発達にはからだが重要な役割を果たしていることから，本研究では幼児のアサーション形成においてからだを使った運動遊びは重要な役割を担っていることが示唆されたと考えられる．

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は，鬼ごっこ遊びにおける共感性を伴った視点取得行動が幼児のアサーション形成に与える影響について明らかにすることを目的としたものである．研究 1 では幼児期におけるアサーション形成に着目し，幼児を対象としたアサーション尺度の作成を通してその基盤が形成されている可能性を示唆している．そこで，研究 2 において，幼児期のアサーション形成と鬼ごっこの中で行われる視点取得行動との関連，さらに，研究 3・4 では視点取得行動だけでなく共感性の視点も加えて検証を行い，からだを使った運動遊びの一つである鬼ごっこの中で，共感性を伴った視点取得行動により幼児のアサーションの基盤が形成されるという新たな知見が提案された．

以上のことより，本論文は研究内容の独創性，研究デザイン，研究方法，当該研究領域に対する理解，および論文の構成・体裁に関して鹿屋体育大学博士論文の審査基準を満たしており，博士（体育学）の学位論文として適切であると判断された．